対面リーディング通信

2014年 12月

2014年１２月1日 発行　　第１５８号（隔月刊）

「対面リーディングの集い 」の報告

日時：１１月１４日（金曜日）　１３時～１６時

今回の「対面リーディングの集い」は、竹田幸代職員より「地域における対面での体験談」ほか、おもに利用者の立場から、「対面」についての話をしていただきました。

ボランティアのかた16名にご参加いただきました。ありがとうございました。

第１部　講演
「対面朗読と私」 講師：竹田幸代　職員

【現在の業務とこれまでの経歴】

５階・サービス部でパソコンサポートを行っている。

「情報バリアフリー推進チーム」の一員として、視覚障害者への情報提供に関する業務を行っている。具体的には行政の広報や企業からの案内をどうやったらわかりやすく伝えられるかを考えている。

社会人になってから網膜色素変性症で視力が落ち、視野が狭まった。白内障の手術もしているので、現在は見たいものの距離に応じてメガネをかけ替えている。

視覚障害の認定を受けた後で「消費生活アドバイザー」（消費生活センターの相談窓口・企業の品質管理の担当者が多く取得している資格）の勉強を開始。その際に対面リーディングを利用して合格。

【視覚障害者が文字資料を読む方法】

１　点字図書館の蔵書を利用する

*サピエ（全国の点字図書館等の蔵書データを公開している会員制のインターネットサイト）から点字図書・録音図書のデータをダウンロードして使ったり、取り寄せ依頼をしたりする。

*書店に平積みされている本などはだいたい音訳・点訳されている。週刊誌も製作されているし、ベストセラーなどは出来上がりも早い。（２ページに続く）

今月号の主な内容

対面の集いの報告			1
情報発信		加治川　千賀子	6
対面リーディングの難所物語		二村　晃	8
視情勉強会	対面リーディングの実際７	木村　謹治	9
情報発信	共遊玩具について	福田　直樹	１３
寄り道・回り道	菜食ごはん　Rocca	木村　謹治	１４
人と人生	版画家　棟方志功	望月　明	１５

（ ;_;)ｳﾙｳﾙ…　**読む人が少ない本は専門書がなかなか製作されていない。**

２　パソコンに取り込む

*専門誌など、なかなか点訳・音訳されていない資料はスキャナで読み取り、ＯＣＲ（光学式文字読取装置）で文字データに変換。

（ ;_;)　**１ページ１ページ読み取らないといけない。時間がかかる。**

*図形・表は読めない。グラフは目盛・凡例などをいっしょくたに読んでしまう。

*「９８～９９パーセントの認識率」ってすごい！けれども実際は“１００文字中１文字は間違っている”ということ。

たとえば…

・「私は」→「私しよ」

・箇条書き冒頭の「□（四角）」をカタカナの「ロ」と、漢字の「力（ちから）」をカタカナの「カ」と読み取ってしまう

・写真を勝手に文字と認識。分厚い本は、広げた時についた影も「LLLLLLLL…」。

・ページの左肩にある見出しも一緒に読んでしまう。

*段組み等レイアウトが複雑なものは、横１列に読んでしまうので内容が分かりにくい。

*手書き文字はスキャナで読み取りにくい。「手書きも読める」という視覚障害者用の機械も開発されているが、一般的には難しい。

３　電子書籍

*iPad、iPhone、電子書籍リーダーなどで本を読む方も増えた。読み上げ機能を使って聞く、写した画面を拡大するなど。

*ただしタッチする操作が大半なので、機器類を使いこなすまでに時間がかかる。誰もが使えるものにはまだまだなっていない。

４　（弱視なら）拡大読書機・電子ルーペを使う

*使い方の練習が必要。大きく拡大すればするほど画面がぶれやすい（手ぶれしているカメラの映像のように、見ていると気持ち悪くなってしまう）。

このように、工夫すれば読めるものもあるが、読めないものも多い。

→<u>人にしか読めないものがある！</u>

【対面リーディング利用のきっかけ】

資格の勉強：専門書やパンフレットを多数読む必要があった。

最初は紙の資料を拡大読書機で読んでいたが…船酔い状態になってしまい頭に全然入らない→情文や地元の公共図書館（枚方市立図）で対面を依頼

★情文で初めて対面を受けた時―すごい！！

*あらかじめ内容は伝えていたが、初見でスラスラ読んでくださった。

*金融関係に勤めておられたボランティアさんや、同じ資格を取得済みの方に読んでもらえた。難しい用語も読み間違いが少なく、勉強しやすかった。

★地元の枚方市立図では

*市がサービスに力を入れている。市内全駅の周辺に必ず 1 か所は分館等がある（２つの中央図、７つの分館、１０の分室）。

*まず図書館に本を預けて、ボランティアさんに下読みしてもらう。

*予約は定期的に入れている。今（11 月）には１月分を受けつけている。

【対面リーディングに対する希望】

・「ちょっと読み」

２時間もかからなそうな資料（チラシとか学校からの案内とか）を読んでほしい。封筒１通分だけでも読んでもらえたら助かる。

でもその短い時間だけのためにボランティアに来てもらうのは申し訳ないので、情文館内でイベントが行われた後など、人が多く集まる時間に読んでもらえる機会があればすごく助かる。例えばイベントの時間や昼ご飯を避けた、昼からの時間帯などに。

（※　以前行われていた「常駐サービス」については後述。）

・情文に来られない方への対応

枚方市は近所の図書館に行けば読んでもらえる。自宅にボランティアが来てくれる市町村もあるらしい。ところが通所している作業所など、自宅でもないし図書館でもないところにはなかなか来てもらえない。

・ボランティアの皆さんには得意分野をアピールしてほしい

★今まで仕事で関わってきたこと
★編み物（さすがに拡大読書機では難しい。得意な人ならうまく説明できるのでは）など、趣味のこと
★語学

利用者のニーズとうまくマッチングできるよう、「私はこんなことができます！」と積極的に教えてください。

【対面リーディングの課題】
ニーズはあるけれども、利用者側に“対面リーディング”が浸透していないのかもしれない。こんな資料も読んでもらえるという意識がないのかもしれない。どうやったらもっとニーズがうまくかたちにできるかが課題。
・例えば PC サポートのために対面室を使用した時の利用者との会話。
*普段は対面リーディングを行っている、と説明すると「それ何ですか？？」
*対面の紹介をすると「いいサービスですね」とおっしゃる。
・例えば就職している視覚障害者の集まりで講演したときのこと。
*資格試験にチャレンジしている方は多いが「本を読むのは無理だ」との声。対面を利用してすごく便利だったと言ったら「えっ、そうなんや！」
・「茶・い・む」（同年代のロービジョン女性の会）で集まった時にも「子供が学校から持ち帰ってくるもの」「私的な手紙」を読んでほしいという意見が出ていた。情文に来たついでに読んでもらえたら便利だなあ、など。
表に出てきていない要望というものもたくさんあるので、当事者として視覚障害者「こんなのを利用したらもっと便利ですよ」「蔵書としての製作は難しくても、対面だったらこんな本も読めますよ」と伝えていきたい。
読書環境が豊かになるように、当事者・ボランティアがお互い何かしていければよいのかなと感じている。

※　「常駐サービス」について　※
・4、5 年前に常駐サービスを行っていた。
・宣伝を「読書」（情文の利用者向け広報誌）に載せたり、５階・サービスフロアに来られた利用者に直接声をかけたりもしたが、ほとんど依頼がなかった。毎日２人のボランティアさんに来ていただいていたが、実際の利用頻度は月１回程度で、ボランティアさんが待機している状態。別の仕事（新聞の切り抜き、図書目録の録音）をお願いしていたこともあった。
・「こんなサービスがあれば便利」と考えたことと、実際の利用回数がかけはなれていたことと、日常的な（要予約の）対面のほうの人数が足らなくなってきたことにより、常駐サービスを終了。

第２部　交流会

引き続き竹田職員も交え、ボランティア１５名、職員３名、元職員の木村さんも含めた２０名で意見交換を行いました。

★フレッシュマンの感想
活動１年目のかたが、今年は５名ほど参加してくださいました。
・講演を聞いて、専門的な分野を持っていなければいけないのかなと、落ち込みかけています…。
・利用者の皆さんは色々なことを知っていらっしゃるので、自分自身がすごく刺激される。
・以前から点訳をやっていましたが、その点字の先生から「長く続けてね」と言われた。
・他の図書館と掛け持ちしている。そこでは針に糸を通す作業を依頼されたこともあるし、代筆したこともあった。読むこと以外にも、見えくいのが原因でやりにくい作業がある。

その中に自分ができることがあればやりたい。
・自分が受験したことのない試験の問題集を読んだ。１回目はちんぷんかんぷんで、「こんなんでええのかなあ」と思いながら、２回目は「ちょっと慣れたかなあ、前よりましかなあ」…。慣れることも大事かな。色々なことに挑戦したら、自分もわかるようになるし。
　・これまで３回が男性ばかりだったので、女性の依頼にも当たってみたいなあ(笑)　特に詳しい分野があるわけではないのですが、機会があれば受けてみようということで、（どんな内容でも）できる限りお断りしないようにしています。

★先輩方からのメッセージ
・やめずに続けることが大事。約束したら体調を崩したりしないように気を付けている。
・仕事を辞めた後で対面を始めた。自分自身が楽しむことを大事に、と知人に言われた。
・あんまり「がんばる」という気持ちよりも、自分自身が新しい人と知り合い、刺激を受けて、楽しんでやることが続ける秘訣かなと思う。
・今でも初めて読む資料は「わあ、読めるかなあ」と思う。全然上手にならない気がする。最近は読み始めて１時間ぐらいしたら目が疲れて、字に焦点が合わなくなってくる。代筆や「ちょっと読み」みたいな短時間のものならできるかも。
・長く続けてきたら緊張しなくなった。
・喉の奥を開いて声を出すと、喉を酷使しないで済むと聞いたの　で実践している。利用者さんに教えてもらった練習方法は「寝そべって読む」。対面の間隔が空くと声が出にくくなるので、一人きりになって近所迷惑にならないような場所で朗読することもある（例えば押し入れに向かって…）
・仕事をした経験が少ないので、対面という仕事に出会えて良かったと感じている。
・（他の図書館でのご依頼ですが）イスラム文学を頼まれたことがあった。ものすごく難しかったので、最初に「私はこの程度しか読めません」と伝えたら、「あなたの読める範囲でいいですよ」とおっしゃった。辞書引いて読み仮名を振って…しばらく大変でしたけど最後まで仕上げました。
・点訳の活動もしているが、利用者さんのお手伝いを違うやりかたで出来ているのが面白い。点訳作業では墨字を目で読み取るのと、点字を指で読み取るのとを同じになるよう、正確に変換しないといけない。それに対して対面は、そこまでの正確さが大事であるとは思っていない。その利用者さんと普通に付き合う、たまたま文章が読めなくて不自由している人を自然体で助けるということではないだろうか。教科書、試験問題など難しい本もあるが、普段依頼される資料なら「一生懸命読まなきゃ」「間違いなく読まなきゃ迷惑がかかる」という気持ちはあまりない。
　・専門書がくることが多いので自然体でやるのはなかなか難しい。初めて場合はどんなかたかわからないので、今でも緊張する。
　・小説とかなら良いけれど、アカデミックな本は難しい。学名が読めなくて苦労したが、読んでもらう側も「わからないから、それはそれでよい」とのこと。「学名です」と言い添えて読み進めている。

★居眠り
・強調して声を張り上げてみる。
・黙ってみる。
・「お茶、飲んできます」と席をたつ。
・寝ているように見えて聞いておられるかもしれないからそのまま続ける。
・録音されているから、また聞き直しされればそれでいい。

★雑談
・雑談中に前職でこんなことを専門にしていた、と話したところ、次から毎回わからないことを質問してこられるようになった。回数が増えたのでお願いして頻度を減らしてもらった。
・気が合う利用者とはおしゃべりになってしまう。また、自分の主義主張と違う論調の本を読んでいる時は思わずツッコみを入れたくなってしまう。ここは討論の場ではないので我慢…。

（職員より：居眠り・雑談は毎年一番関心が集まる話題です。集いの報告は毎年１２月号に掲載しております。「対面リーディング通

信」のバックナンバー（PDF 版）は、情報文化センターのホームページで閲覧可能です。インターネットを利用しておられる方は是非ご覧ください。）
http://www.iccb.jp/download/taimentsushin/

★対面中のトラブル
・途中に官能小説のような場面が出てきてしまい、思わずスピードアップして読みきりました。利用者はどういう本はわからずに持ってきておられたものですから、ちょっと不親切だったかなあ。
（職員より：そこに何が書かれているかご存じない状態で持って来られることが大半ですので、こういうアクシデントは起こる可能性があります。どうしても嫌な場合はその場で「申し訳ないのですがこういう理由で読めません」と断っていただいて結構です。予約される時点で内容がわかっている場合は「私は読んでもいいですよ」と言ってくださっている方々に依頼しています。）
・「利用者とプライベートな付き合いをしないように」と言われていたが、親しくなった利用者から「けがをして外出できない状態なので、自宅へ来て対面リーディングしてください」と頼まれた。いいですよ、とご自宅へ何度か伺っているうちに「物がなくなった！」と決めつけられ怒られてしまった。それが原因で一時期対面をするのが嫌になって休んでいたことがあった。
・帰りに買い物に付き合ってくれとか、駅まで迎えにきてくれ、などもあった。方向が同じだから「いいですよ」と受けたけれど…時には嫌な思い出もある。
・情文に入って出てくるまでの関係にしなさい、道案内とかお買い物は絶対やめなさい、と言われたことがある。
（職員より：館の外での用事を頼まれたときは職員に相談してください。そこからバトンタッチして、道案内・ATM の操作などを職員が代行したことが過去にありました。）

★他の図書館の様子
　竹田職員より、情文・枚方市以外の図書館でも活動しているかたに質問。大阪市内の図書館は全部回ったことがあるが、部屋はあるけど「対面朗読しているかたはいません」と答える施設が多かった、とのこと。
　（※　以下、活動しておられた当時の状況ですので現在は変わっている可能性があります。）
・１週間前に本が来るので、録音できるぐらいに時間があって十分調べることができる…が宿題みたいで大変。
・京都ライトハウスの例：予約のかたとは別に、１日４名（午前・午後２人ずつ）「読み書きサービス」ボランティアさんに常駐してもらっている。予約不要。
・寝屋川市で地域の対面ボランティアグループに所属していたことがある。駅のすぐ近くなので立地は非常に良くて、広報にも案内を載せていたのだが、当時は読んでほしいという利用者が全く来られなかった。
・情文は地域の図書館とはちょっと違って、専門書が多いし難しくて困るという声をきいた。自分も楽しんでできる本のほうがいいけど、兼ね合いが難しいですよね。
・図書館や団体が対面朗読を実施していることを知らない方が多い。ライトハウスでも、リハビリテーションセンターに入所・通所されているかたが、情文とそのサービスを知らないことがよくある。利用開始時に必ず法人内のサービスは説明しているが、今すぐ必要なことではないと判断されたり、読書に興味がないから必要ないと思っておられるのかも。
　なお、講演で話題に挙がった「ちょっと読み」については現在対面担当者間で実施可能かどうか検討中です。
　交流会出席者の方々からは「これならできるかも」という反応が多かったです。
　実施するとなった場合には以下のようなかたにお願いするのはどうか、という意見が出ました。
・比較的近所のかた
・午前中（１２時まで）読んだ方にもう少しだけいてもらう
・他の部署（点字・録音製作）での活動で来館している時の、空いている時間

　実施場所と方法について竹田職員からは４階・会議室、５階・サービスフロアなどで、

１人のボランティアさんが複数人いる依頼者の持ってきた資料を順番読んでいくという手順ではどうかという提案がありました。
　プライバシーのことも考えると、時には普段通り対面室に入っていただき、１対１で行うことも必要かもしれません。
　今回参加されなかった皆様からもご意見をお待ちしております。

【担当からのお知らせ】
・世話人さんからのお話の中で「ボランティア交流会」と「ガイド体験会」のことが話題に挙がっていました。
「ボランティア交流会」は毎年３月初旬、情文の全ボランティアを対象にした一番大きな集まりです。ボランティア友の会によるバザーも開催されます。
「ガイド体験会」は毎年５月ごろ行われる、視覚障害者の手引き（ガイドヘルプ）の勉強会です。是非ご参加ください。

・このところ同じ月に２度依頼をすることが増えています。
もしご都合がよければぜひ２回目の対面にご協力をお願いいたします。

情報発信

　オンキヨー株式会社、毎日新聞社点字毎日と公益財団法人「日本教育科学研究所」が開する「第１２回オンキヨー世界点字作文コンクール」で、当センターの加治川千賀子（かじわちかこ）職員が国内部門のサポートの部で入選しましたので、ご紹介させていただきます。
なお、以下の URL でもご覧いただけます。ぜひご一読ください。
　URL：http://www.jp.onkyo.com/tenji/2014/result_japan.htm
　（特別賞「視覚障害を理解することから共感しあえるサポーターをめざして」）

　点筆が紙を貫く心地よい感覚は瞬く間に私を夢中にさせました。１９９２年、市の広報で見つけた点訳講習会。初めて出会った視覚障害（全盲）の先生は、白杖１本で館内を自由に歩き回り、分厚い点字教本の上で指を滑らせながら講習会を進めていきます。毎回、新鮮な驚きの連続でした。講習会が終わると、点訳は日課となり、ゲームにはまった子どものように時間を忘れて没頭しました。私の願いは、「一人でも多くの人に読んでもらいたい」。
　地元の視覚障害者の会合へお手伝いに出かけた私は、時間をいただいて、「ご希望のものを点訳します、何でも依頼してください！」と伝えました。すると、年配の男性がゆっくりと立ち上がり、「ご苦労様です。ありがとうございます。まず、点訳の前に私たちの生活を知ってくださいな」と静かにおっしゃいました。気恥ずかしさに包まれました。なぜなら、当時の私は、「視覚障害者＝点字を読む人」ぐらいの認識しかなく、点字を読めない人がいることや、見えにくい人たちの存在など全く知らなかったのです。
　チャンスが訪れたのは２００３年。地元の生涯学習センターで点訳講習会が開かれ、週替わりで４人の全盲の方がゲストに招かれると知り、参加しました。日頃の生活ぶりや、職場で活躍される話は、自分が描く視覚障害者の姿とあまりにかけ離れていました。
視覚障害の人にもっと会いたい、そんな気持ちが強くなりました。
（７ページへ続く）

講座が終わると、メイン講師だった全盲のMさんを中心に有志で点訳サークルを立ち上げました。自動販売機や市民会館の座席に点字シールを貼ったり、晴眼者と視覚障害者が一緒に見られるよう、墨字と点字を併記したメニュー（アルバム台紙にメニューのカラーコピーを挟み、上から点字シールを貼付）を作りました。店に飛び込み、「点字のメニューを作らせてください」と交渉するのは勇気がいりましたが、「何、食べる？」と自分たちが作ったメニューを一緒にのぞき込み、あれこれ迷う時間は楽しいものでした。一緒に出かけることで、本以外にも必要な情報はたくさんあるんだとわかるようになっていきました。

もっとたくさんの視覚障害者と出会いたい。この願いもすぐにかなう日がやってきました。点訳講座の受講生だった全盲女性から、「パソコンの画面を見て、アドバイスしてほしい」と頼まれました。スクリーンリーダー（画面読み上げソフト）を使えば見えないのにパソコンが使えるの？　一緒にやってみたい、サポーターになりたいと、日本ライトハウス情報文化センターでパソコンサポートボランティアの講習を受けました。「一緒に買い物に行ってもらえる？」「パソコンを習いに行くので付き合ってほしいの」。遠くへ出かけるのなら、安全に誘導できなければ……とガイドヘルパーの資格も取りました。

彼女が私を次々と出会いの場へ連れ出してくれたおかげで、見えない世界への興味はますます広がり、気づけば、週の半分は視覚障害の方々と関わるようになっていました。

私自身の外出先も変わっていきました。印象深いのは、視覚障害者団体が開く集まりや万博公園で木々の葉音や風を感じながら散策したイベント、日本ライトハウス展、ブラインドレストラン、まっくらくご（暗闇での落語会）、ブラインドテニス、ダイアログ・イン・ザ・ダーク（暗闇の対話）などなど。

そこでは視覚を閉ざしても、残りの四感（聴覚・嗅覚・味覚・触覚）がだんだん目覚めていく感触を味わえたり、予想もつかない発見がいくつもありました。見えない疑似体験は、しだいにその人の状況やテンポに合わせたサポートに生かされていきました。

付き合いが深くなった友人から「あなたといると気を使わなくていい。」「あなたのサポートはさりげなくて気持ちがいい。」と言ってもらえた時は本当にうれしかったです。

講演などで「見えにくさや見えないことは不幸ではなく不便なこと」とよく耳にします。その真意が理解できても、「お手伝いしましょうか……？」という気持ちなら、互いの間に少し距離があるでしょうか？　私は、同じ目線で相手の思いを感じ取って共感できたとしたら、そこに心地よい関係が生まれてくるのだろうと思っています。

あの年配男性の言葉がなかったら、私は一人の点訳者で終わっていたかもしれません。

６年前、ご縁があって、日本ライトハウスの職員となり、これまでの出会いや数々の経験が生かせる場となっています。ここまでの道程をサポートしてもらったのは私なのかもしれません。これからもずっと皆さんと共に歩んでいきたいと思っています。

ちょこっとガイド

聞かせる新聞１万号

「小樽朗読友の会」が発行している音訳雑誌「今日のニュースから」（日刊）が通算1万号に達したそうです。1980年のスタートから34年の節目を迎え、会員たちは「先輩たちが始めた偉業を、つないで来られた」と喜びをかみしめています。

日曜日や図書館休館日を除いて新聞を毎朝音訳し、即日発送する取り組みは道内では小樽のみで「全国的にも珍しい」と言う。送付の対象となる視覚障害者は市内で約430人おられ、同会は「さらに多くの人たちに聞いてもらいたい」と利用を呼びかけています。

34年間、毎日発刊とは大変な偉業ですね。（ 2014/11/13 北海道新聞）

79．岩井和彦氏を悼む

二村　晃

先月号のこの欄で、「どうしても読みたい！　どなたか音訳して頂けませんか？」と、お願いして１カ月も経たないうちに、私の手許に、池澤夏樹著『アトミックボックス』のデージー図書が送られて来たことを報告しました。堺市の視覚・聴覚障害者センターからの贈物でした。何と、今年の２月に音訳されていたのです。群像の書評欄で紹介されるより数カ月前に音訳作品が完成していたのです。本の選定に当られるスタッフの鋭敏な感度に敬服しました。そして、もう４年になりますか？　日本ライトハウスの常務を退任されてこの堺市の視覚・聴覚障害者センターの所長に就任された元情報文化センターの館長だった岩井和彦さんの意欲的なお仕事ぶりを思い浮かべたのです。癌に侵されたお身体で、その病魔と闘いながら、職員と音訳ボランティアさん、利用者が一体となった新しいセンター運営に持前の指導力を発揮なさっているご様子を承り、頭の下がる思いでした。

その岩井さんが、この10月30日に逝去されました。堺から新しい風が吹き寄せることを感じていたのは、私だけではなかったでしょう。ご本人も残念でしょうが、視覚障害者の世界で、本当に惜しい人を亡くしたものです。
「堺はこれから漫画本に力を入れますよ！」と、「耳で読み、楽しむ漫画を与えて！」と希求する私に、わざわざメールを下さったのは昨年秋のことでした。花園大学の漫画専攻研究者を招き、音訳ボランティアさんと共に、視覚障害者が耳で読んで楽しむ漫画を提供する準備を進めていらっしゃいました。彼の遺志はセンターの皆さん方によって、きっと実現していくことでしょう。

岩井さんとの忘れられない思い出は、一昨年の６月、高知にご一緒したことです。高知点字図書館主催で、中国・四国点字図書館連絡協議会が開催され、『職員・ボランティア研修会』に講師として招聘され、ご一緒したことです。岩井さんは点訳の部を担当され、私は音訳の部を担当しました。いつものように、『耳で読む歓びと哀しみ』の演題でお話したのですが、つい興に乗って、漫画の音訳をぜひ心がけてとお願いしました。夜の懇親会では、本場の鰹のたたきが主役だったのは言うまでもありませんが、漫画音訳について話が弾み、漫画好きの岩井さんと意気投合したことでした。

もう５年前になりますが、この難所物語が第100話に到達したのと、私の喜寿を記念して『耳で読む読書の世界ー音訳者と共に歩む』を上梓した際には、推薦文を書いて下さった上に、日本ライトハウスの推薦図書にも指定して頂きました。そして、出版祝賀会での心暖まるお祝辞も……何から何までお世話になった方でしたねぇ。
長年にわたっての癌との闘病、さぞ大変だったことでしょう。副作用に苦しみながら、明るさを失わず、日本ライトハウス常務から堺市視覚・聴覚障害者センター所長の要職を務め上げ、私の癌にも存分の気配りを頂きました。どうぞ安らかにお眠り下さい。　合掌

木村（きむら） 謹治（きんじ）

対面リーディングの実際 7

（「図表の読み方」改題）

― 新聞を読む ―

昔はテレビに押されて、最近はインターネットで情報を得る人が増え、新聞の影も薄くなってきました。とは言え、情報摂取の主要なメディアの一つには変わりありません。

余談ですが、視覚障害者にとって新聞と言えば『点字毎日』を指します。ただ、週刊紙で、しかもページ数が薄いため、情報量では墨字の新聞に敵うものではありません。

利用者の希望を聞く

さて、皆さまも何度か新聞を読む機会があったのではないかと思いますが、どのように読まれましたでしょうか。利用者の希望も千差万別、一括りにまとめることは不可能。また、同じ人でも、時と場合によって読み方が変わります。

まず、最初に利用者の希望を聞きましょう。最近起きた大事件の経過や、スポーツの結果など特定のテーマや目的の記事を希望されているのか、それとも、見出しを読み上げ、必要な記事を読むのか、或いはそれ以外か。対面の基本中の基本ですが、新聞を読む時も必要です。

複数の新聞を読む場合は、日付順なのか、どの新聞からかなど読む順番も聞きましょう。

新聞社のお勧め記事

皆さんは何面から読まれますか。僕は後ろから読むのが癖になっています。最近は新聞の文字が大きくなり、カラー版が当たり前になって、読みやすく工夫されてきました。その中の一つとして見出しのようなもの（左の写真、朝日新聞のロゴの下）が付いています。１面を飾る記事でもないが、新聞社がお勧め（？）の記事の要約でしょうか。

１面から読んでいく時は、案外役に立ちます。ここから読み始めるのも一つの方法だと思います。

新聞社により書かれている位置が多少違います。５階の対面室横の本棚に、朝日・毎日・読売・サンケイの４紙が置いてあります。お勧め記事一覧（？）の位置を確認するほか、紙面の構成など大雑把に憶えていただければ対面に役立ちます。

例えば多くの新聞は最終ページに番組欄がありますが、日本経済新聞は別の場所に掲載されています。この様に各社のページ割りには特徴があります。

見出し

新聞には、大見出し・中見出し・小見出しなどがあります。また文字の大きさは同じでも太文字で書かれていたりしていて、記事の訴え方が違います。

一般的には見出しの大きな方から小さい見出しへと、見出しのみを先に読みます。

いきなり読み始めないで『〇〇面の見出しを読みますね。もし、読みたい記事があれば声をかけて下さいね。希望の本文を読みます。』など、読む前に声をかけて下さい。

また、見出しが多い時は『大きな見出しが４つあります。「・・・」と「・・・」・・・』というように、紙面の構成を紹介するのもいいですね。

利用者から希望がなければ、次の紙面に移ります。『〇〇面の見出しはこれで終わります。次の紙面を読みますね。』と案内すれば完璧です。

紙面の流れ

無秩序に書かれているように感じる記事も、よく見ると右上から左下への流れがある事が多いです。流れを知るだけでも読みやすくなります。

もちろん全ての紙面がこの法則に則って書かれているわけではありません。

普段読まれていて新法則が見つかれば教えて下さい。

利用者からその記事を読んで下さいとのリクエストが来れば、見出しの読みを一時停止し、内容を読みます。関連記事があれば、内容を読み終わってから『こんな記事も載っていますよ』と紹介するのもいいですね。

記事を読んでいる途中で『もう結構です』との希望を受ける場合もあります。その場合は、そこで止め次の見出しへと移って下さい。

番組表

晴眼者の大半は、番組表と言えばテレビ欄を思い浮かべますが、ラジオ欄もあります。

ボランティアにお聞きしたところ「テレビ欄と違い、なれていなかったので読むのが難しかった」とのことでした。

複雑にしているのは大阪で聞く事ができるもの以外に、近畿地方全般の番組が掲載されているからでもあります。大阪で聞ける AM・FM 局を知っていると便利ですね。

テレビ欄もラジオ欄も共通するのは、放送が終わった番組も読む必要かあるかどうかです。

たいていの利用者は１２時または１５時に対面を終了します。一般的には、それ以前の番組は聞く事も見ることもできません（オンデマンドという方法もありますが）。『〇〇時以前の番組は必要ですか？』と聞く事でスムーズに対面を進めることが出来ます。

略語や分かりにくい見出し　「J パワー 山口に火発」って何？

公明結党50年機に――
「NEW」とります

公明党は25日、政党名の英語表記を、これまでの「NEW KOMEITO」から、結党時に使っていた「KOMEITO」に約20年ぶりに戻したことを明らかにした。結党50年を迎える機会に「NEW」の文字を取った。

印ネット通販に3割出資
ソフトバンク インドに新規で1兆円

Jパワー 山口に火発
新設検討 大ガス・宇部興産と

最近では少なくなってきましたが、見なれない略語をお目にかかる事があります。

「火発」って何でしょうね？　記事を読んでみると「火力発電所」の略でした。

左の例では、「NEW とります」や「印ネット通販」と読まれても分からないですね。「NEW」の言葉は知っていても、「とります」に、いかに結びつくのか不明です。また、「英・米・仏」なら日常的に使っていても「印」は分からないですね。記事の中から読み解き『NEW は NEW KOMEITO の NEW です』とか『印ネットの印はインドのことです』或いは、直接『インドのネット通販に・・・』と読み替えることぐらいは許される範囲です。

広告

広告、特に図書の広告は希望の多いものの一つです。目録では著者名・書名など一定のルールに基づいて読みますが、ここでは目に付いた大きな文字から読んでもかまいません。

左の例では『大和書房（だいわしょぼう）の本が載っています。全部で６冊です。例えば「ニューヨークの・・・」があります。著者はエリカという人で、きれいなだけの女性は・・・と書かれています。もう少し細部まで読みましょうか？・・・・』。或いは６つの大きな項目を先に読んでから、内容を詳しく読むか尋ねる方法でも構いません。

掲載されている形式は雑多なので、それぞれにあわせて変えて下さい。形にとらわれないで家族に説明するぐらいの気持ちで読む方がうまくいく場合があります。

雑誌の希望もよくあります。小さな誌面にぎっしり書かれています。順番に読むのも、大きな見出しから読むのも、どちらも正解です。特集などがあれば、『〇〇という特集には５つの記事が書かれています』と言うように、関連の記事がいくつか書かれているのか説明するのも一つの方法です。

この種の広告には、強調するためにカギカッコを多用され

る傾向にありますが、特別な場合を除いて省いて読んでもかまいません。

探して読む

利用者から特定の記事が書かれていないか聞かれる場合があります。特にいつも対面を利用されている方は『〇〇を読んで下さい』と希望される場合が多いです。

例えば「TPP に関して何か載っていますか」「阪神の野球記事を読んで下さい」とか「歴史書の本の紹介が載っていますか」など、読む項目を指定される場合があります。

言われた内容によって、政治面か経済面かスポーツ欄か生活欄かなど見当を付けて探します。

その時に気をつけていただきたいのは、黙って探すのは避けていただきたいのです。新聞の音がガサガサと聞こえるけれど、何をしているのか分からないのでは不安になります。

『１面は載っていないし、２面は増税・成長率・・、この面にもないし、３面は・・・、えーとスポーツ欄では・・・』と読んでいるのでもないし、ただ、ぶつぶつ言っているようで構いません。**調べている様子を口に出しながら対処して下さい。様子が聞こえてくれば、利用者も状況が分かり、安心・納得できます**。

普段から

出てくる頻度の高い言葉や人名は憶えておくと上手く読めます。

例えば内閣改造の時には閣僚名にルビ付きで書かれています。また、相撲の番付表では力士名が載っていたり、高校野球の学校名も読みが書かれていることがあります。

テレビのニュースでも読み方を憶えることが出来ます。全ての言葉を憶えるのは不可能ですが、政治欄では政治家や政治用語、スポーツ欄ではスポーツ選手、芸能欄では俳優や歌手など、出てくる可能性の高い言葉や人名を憶えておくと便利です。おまけに頭の体操にもなります。

最後に

対面リーディングにはこれが正解、これでないとダメというものはありません、利用者の希望を聞き、出来るだけ希望に叶うように読んで下さい。上に書いた会話調の文章は、一つの例を示したもので、同じように読む必要はありません。

肩肘張らずに、自分が、或いは家族が新聞を読んでいる姿を思い浮かべ、それを参考にしながらどう読めば上手く伝わるか想像してみて下さい。それが上達への１番の近道だと思います。

「共遊玩具」について

図書・情報係　福田 直樹

クリスマスが近づき、おもちゃの広告を目にする機会が増えてきました。今回はおもちゃの中でも目や耳の不自由な子どもたちや大人の方々が、そうでない方々と一緒に遊べるように配慮がなされた「共遊玩具」をご紹介します。

初めは視覚に障害のある子どもたち向けのおもちゃが開発されていたそうですが、特別にデザインされたものは少量生産で値段も高く、利益を出すことができなかったそうです。その後80年代後半の不況もあり、メーカーとして財政的に続けていくことが難しくなってしまいます。そこで「特別なものを作ろうとするからコストがかかるのでは。普通に作るおもちゃにちょっと工夫してみたらどうか？」という発想から「共遊玩具」というアイデアが生まれたのだそうです。

現在では日本玩具協会に共遊玩具推進部が設置され、以下の活動が行われています。

・より多くの人々に楽しんでもらうため、今後開発・販売するおもちゃ・ゲームについて、目や耳の不自由な人々にも充分遊べるような商品作りを業界内に働きかける。
・各福祉団体及び「共遊玩具」使用者への情報提供を行なう。
・活動内容の業界内外へのＰＲを行なう。

なお、目の不自由な人々のために配慮がなされた玩具は「晴盲共遊玩具」（せいもうきょうゆうがんぐ）と名付けられ、パッケージには盲導犬として多く活躍するラブラドール・レトリバーをデザイン化した「盲導犬マーク」が表示されています。また、耳の不自由な人々のために配慮がなされた玩具のパッケージにはウサギをデザイン化した「うさぎマーク」が表示されています。

〈盲導犬マーク〉

〈うさぎマーク〉

私が「共遊玩具」の存在を知ったのは、ライトハウスで商品販売に携わるようになって「わかりやすいゲームはないか」「一緒に楽しめるおもちゃが欲しい」などの声を多く聞いたことがきっかけでした。まだまだメジャーな存在ではないのですが、いろいろな工夫で誰もが楽しめる物作りが行われていることが広く知られるようになればと思います。

本館の５階には白と黒の駒の違いが手触りで分かるオセロや、時間を音声で知らせてくれるハト時計などの共遊玩具を展示、販売しています。対面リーディングで来館されたときなど、ぜひ手に取ってみてください。

「どこでもハト時計」
（タカラトミーアーツ）

【共遊玩具推進部の HP】
http://www.toys.or.jp/jigyou_kyoyuu_top.html

寄り道・回り道

レポーター：木村（きむら） 謹治（きんじ）

菜食ごはん Rocca（ロッカ）

【所在地】　大阪市西区土佐堀1-6-6 1F
【電話番号】　06-6444-5765
【行き方】　地下鉄四つ橋線肥後橋駅３番口　徒歩８分
【営業時間】　昼御飯 11:30 ～ 14:00　晩御飯 18:00 ～ 22:30
【定休日】　日・祝・第２土曜日
【URL】　http://www.rocca-cafe.com/menu.html

情文・本館を北に渡って、すぐの道を斜め左に歩きます。丁度、美術館に行く方向です。道すがら魅力的な店が沢山ありますが、今回は見送って、もう少し歩いて下さい。交差点を横切って少し行った所に「菜食ごはんRocca」があります。

メニューはいたって簡単。昼も夜も、野菜だけの日替わり菜食ごはん１種類のみ（1000円）です。それに、奈良県月ヶ瀬の岩田さんの有機栽培ほうじ番茶が付きます。

注文の必要は無く、黙って座れば菜食昼ごはんのお盆が運ばれてくる、ずぼらな人にはもってこいのランチと言えます。

厨房を覗き込むと一つ一つ丁寧に盛りつけされています。見た目もきれいで食欲をそそります。出てくるまで案外時間がかかるのは、この丁寧さがあるからでしょうか。

お米は玄米のまま送ってもらい、使う分だけ精米し、3分づき米を炊いています。ご飯の炊き方も、これくらいがいいなという感じで、とても美味しくいただきました。

日替わりなので、日によって違いはありますが、基本は野菜中心。ちなみに僕が食べたのは

- 大豆タンパク団子のせ色々野菜の煮込み
- さつま芋と林檎のきんとん
- ごぼう、カブの葉、白葱のにんにく風炒め
- しろ菜のお浸し
- 自家栽培米・有機栽培コシヒカリ３分づき米
- 天然醸造味噌汁、自家製糠漬け

でした。

味の濃すぎないと言うか、素材の味わいが生かされていて、それぞれに工夫がされていて、味わい深い料理と言えます。薄味の五味のバランスが抜群に絶妙なランチですね。

糠漬けは少しすっぱめで２切れしかないのがとても残念でした。

食事にプラス200円で、有機コーヒー又は岩田さんの和紅茶がつきます。ただし、お昼のみとなっています。

やはり、食事にはアルコールがつきものだとおっしゃる方には500円でハーランドビール（小瓶）が飲めます。

食事は楽しみながら食べなくてはね！

徒歩の方　地下鉄四ツ橋線「肥後橋」駅　西へ徒歩７分
お車の方　阪神高速「土佐堀」または「中之島」出口　５分
（※すぐ横にコインパーキングがあります。）

人と人生

版画家　棟方志功（１９０３～１９７５）

対面リーディング・ボランティア　望月 明

ー幼い頃、囲炉裏の煤(すす)で眼を病み、以来極度の近視となるー

◆生い立ち・経歴など

＊青森県出身。２０世紀美術を代表する世界的巨匠の一人。明治３６年、青森市で代々、鍛冶職を営んできた父棟方幸吉・母さだの三男として生まれた。

少年時代にゴッホの絵画に出会い感動し、「ゴッホになる」と芸術家を目指した。絵の仲間たちと会を作って、作品の展覧会を開き、後に東奥日報社（とうおうにっぽうしゃ）の編集長になった竹内俊吉（たけうち しゅんきち）氏(元青森知事)から高い評価を受けたこともあって、絵描きになる決意を一層強くした。

＊極度の近視のために、眼鏡が板に付くほどに顔を近づけ、軍艦マーチを口ずさみながら“板画”を彫った。

＊１９５６年(昭和３１年)ヴェネツィア・ビエンナーレに『湧然する女者達々（ゆうぜんするにょしゃたちたち)』などを出品し、版画部門で、日本人として初の国際版画大賞を受賞。

＊１９７０年、文化勲章受賞。

◆“板画”について

＊１９４２年(昭和１７年)以降、彼は版画を“**板画**”と称し、木版の特徴を生かした作品を一貫して作り続けた。

＊棟方いわく『私が板画という字を使うので、‘板’と‘版’とどう違うのかと聞く人がいるんですよ。私も板画を始めた頃は、‘版’という字を使っていたんだが、板画の心が分かってからは、やっぱり、板画というものは、板の生まれた性質を大事に扱わなければならない、木の魂というものを直に生み出さなければダメだと思いましてね。他の人たちの版画とは別な性質から生まれていかなければいけない。板の声を聞くというのが、‘板’という字を使うことにした訳なんです。』

＊「**板画**」の代表作は「釈迦十大弟子（しゃかじゅうだいでし)」「御鷹揚げの妃々達々（おんたかあげのひひたちたち)」「大和し美し（やまとしうるわし)」「東海道棟方**板画**（とうかいどうむなかたはんが)」「**板画**奥の細道（はんがおくのほそみち)」など。

＊棟方の‘**肉筆画**‘作品は「**倭画**(やまとえ)」と言われ、国内外で板画と同様に高い評価を受けている。

◆広い範囲での活躍

棟方は、板画のほかに、油絵、倭画、書、詩歌などに多くの傑作を残している。著書類も多く、「棟方志功板画大柵（むなかたしこうはんがたいさく)」「板極道（ばんごくどう)」「わだばゴッホになる」など数十冊にのぼっている。

◆作品名についた‘柵’について

棟方いわく『「柵」というのは、垣根の柵、区切る柵ですが、私の「柵」はそういう意味ではありません。字は同じですが、四国の巡礼の方々が寺を廻られるとき、首に下げる、寺へ納める廻札、あの意味なのです。この札は一つ一つ、自分の願いと信念をその寺に納めていくという意味で下げるものですが、私の願所に一つ一つ願かけの印札を納めていくということ、それがこの柵の本心なのです。

ですから納札（おさめふだ）、柵を打つ、そういう意味にしたいのです。大抵、私の板画の題には「柵」というのが付いていますけれども、そういう意味なのです
（「蓮如上人の**柵**（れんにょしょうにんのさく）」「御二河白道之**柵**（おんにがびゃくどうのさく）」など）。一柵ずつ、一生の間、生涯の道標を一つずつ、そこへ置いていく。作品に念願をかけて置いていく、柵を打っていく、そういうことで「柵」という字を使っているのです。この柵は、どこまでも続いて行くことでしょう。際々無限に。』

◆“無類の甘党”だった棟方

『先生の作品に接した若き日の先代は、これからの菓子屋は、先生の人間味あふれた暖かさ、そしてバイタリティが必要だ」と開眼。早速「十万石まんじゅう」を小脇に抱え、先生の元を尋ね、「是非、このまんじゅうを食べてみて下さい」と差し出したと言います。無類の甘党だった志功先生は「あんたが作ったのかい」と一口食べ、一気に５個もお召し上がりになられたとか。６個目のまんじゅうに手を伸ばしながら、「うまい」「うますぎる」とおっしゃり、直ちに絵筆をお持ちになりました。

忍城(おしじょう)のお姫様が生きていれば、きっと同じことを言ったに違いないと、皆様お馴染みになりました絵をお描き下さったのです（下記）。

そして‘十万石**慢頭**’とお書きになったのです。先代がすかさず「先生、‘慢’は‘食片の饅’です。」と指摘すると、「このまんじゅうが全国に広く知れ渡ることを願ってこの字にした」と お答え下さったのです。先代は、改めて先生の暖かい配慮に感動し、そのまま使わせて頂くことになりました。十万石にとって、棟方志功先生の絵は、菓子作りの原点ともいえるのです。』（十万石ふくさや横田社長）

お断り：以上の内容はインターネット上のWikipedia フリー百科辞典、「棟方志功の言葉」「菓子文化を見つめる十万石　十万石慢頭」などの諸情報を抜粋要約したものです。

訂正とお詫び

先月号の「情報記号の読み方」の中に誤りがありました。訂正してお詫びします。

＆　【正】アンパサンド／アンド／アンドマーク
'　【正】アポストロフィー／アクサンテギュ／シングルクォーテーション
]　【正】角カッコ（閉じ）／大カッコ（閉じ）

12/15～25の間、中之島のほたるまちに「ラバーダック」がやってきます。川面に浮かぶ巨大なアヒルの姿はとても癒されます。お時間のある方はぜひ。おすすめです。（F）

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6441-0015（代表）
06-6441-0039（サービス部）